

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00004

研究課題名(和文) プラトンによる魂の原的把握についての問答法的・国際的研究

研究課題名(英文) An international dialectical study in Plato's basic conception of the soul

研究代表者

荻原 理 (Ogihara, Satoshi)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：00344630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：プラトンによる魂の原的把握は次のものであることが明らかになった。人の魂は内側から言えば意識であり、そのものとしては徳・悪徳、知・不知をもちうるが、劣らず重要であるのは、魂は善に向かう、あるいは善から逸れる動きのうちにある(むしろ動きである)という点だ。

魂のこうした把握は、以下の諸点から浮かび上がる。プラトンにとって、教育の完成には、魂の「目」の下降傾向に抵抗する強制が必要である。魂は自らに生命をもたらし続け、それがやむはずはない。魂と身体の関係が問題になるどの場面でも、魂の身体からの独立性が示される。ソフィストの欺瞞は分裂の意識をもたらず。人の理性は、宇宙を支配する理性の原因性を模倣する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、プラトンが様々の領域で固有な事象を丁寧に鋭く把握しつつ、諸領域を無理のない形で結び付けていることを示した。次の諸点を示すことによってである。即ち、プラトンにとって人の魂は(特に徳と知の達成において)自己同一性を示すが、このことは、魂がある動きのうちにある(動きである)ことと両立する。プラトンは魂をその完成との、存在・実在との、生命の供給との、身体との、宇宙との関係において、明確な形で把握している。

本研究は、心・自己の理論的理解 とくに、倫理性と責任の主体としての心・自己を、科学的世界像とどう折り合わせるのか、折り合わせないのかの検討を課題とする理論的理解に 貢献すると期待される。

研究成果の概要(英文)：This research has shown that Plato conceives of the soul in the following manners. Human soul is one's self so that it is, viewed from within, awareness and, viewed as such, admits of virtue or vice, knowledge or ignorance. No less important is the fact that the soul is in, and even is, the movement of either approaching or deviating from the good.

Such a conception of the soul has emerged from the following points that I have argued for. For Plato, for proper education the soul has to be compelled against its tendency to 'look downward' (REP). The soul by nature keeps providing itself with life and cannot cease from doing so (PHAED). The relationship between soul and body is discussed in various contexts but in each context the soul is shown to be in some sense or other independent from the body. The sophist's deception of others and themselves creates uneasiness in mind (SOPH). Human reason's attempt at making one's life happy imitates World Reason's governance of the universe (PHIL).

研究分野：西洋哲学

キーワード：プラトン 魂

1. 研究開始当初の背景

魂（プシューケー。心と訳せる場合もある）はプラトン哲学の最重要概念のひとつである。魂の徳、魂の浄化、魂の不死や転生、魂と身体の関係、魂の三部分、宇宙靈魂と個々の魂、など。そうした論点や議論は通常、「プラトンの教説」として扱われ、それぞれの主題について尊敬すべき研究の蓄積がある。だが、プラトンが対話篇において、対話の文脈の中で、登場人物の問答の形で提示した思考が「プラトンの教説」として扱われた途端に、プラトンの思索の繊細にして重要な何かが取り逃がされてしまったように思えてならなかった。魂をめぐるプラトンの思考について、これまでの研究では取り逃がされていたように思えるものを捉えたい、という動機が、研究開始当初、研究の背景にあった。

2. 研究の目的

そこで本研究は、それぞれの論点や議論がそこから立ち上がる、魂の原的把握を主題化し、その特質や動向を解明しようとした。それによって、魂をめぐるプラトンの様々の具体的な論点や議論がどのような意義と射程を持つのかを、一層明らかにすることが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

本研究の方法には二つの特徴があった。

本研究は第一に、問答法的であった。プラトンの著作が論文ではなく対話篇であるという事実を重く受け止めるという意味でもそうだし、申請者が他の研究者と対話し、テキストの熟読を通じてプラトンと対話するという意味でも問答法的であった。

第二に、本研究は国際的な意見交換や発信を重視した。

4. 研究成果

特に重要な成果の前には、「○」ではなく「」を付す。

発表 'Education-related compulsion in Plato's *Republic*' ('プラトン『国家』における、教育と関連した強制」)

・第1回目、Symposium on Plato, 東北大学 2018年1月29日。

・第2回目、2nd Asia Regional Meeting of the International Plato Society, 台北 中国文化大学 2018年4月22日。

・第3回目、世界哲学会議、北京 China National Convention Center 2018年8月17日。

『国家』の該当箇所、教育に関連する強制が、初めは“本人の意に反して”という意味だったのが、やがてそうではなく、「魂の目」の下降傾向に反してという意味になると論じた。強制されるのは各人ではないという点も指摘した。3度の発表を行なったが、質疑等でフィードバックを受けるたび改稿に反映した。

単著『マクダウエルの倫理学 『徳と理性』を読む』（勁草書房、2019年2月）。ジョン・マクダウエルの難解な倫理的議論（プラトン、アリストテレスら古代ギリシャの洞察の復権をもくろむ）をわかりやすく解説しようとしてみた。解説とはいっても著者（研究代表者）自身の、ときに立ち入った諸見解を示しており、マクダウエルの論敵であるブラックバーンと著者との応酬をも収めている。徳を<そのつどの状況からいかなる行為を要求されているかを見て取る能力>と捉えるマクダウエルの立場が有望であることを示そうとした。その立場は、合理性をめぐる近現代的偏見（人間の実践の合理性は当の実践に外在的な視点から正当化できなければならないとする）の鋭い批判と軌を一にしている。

この著書と関連するイベントして、

○ 書評会、本著単独、現代倫理学研究会、東京外国語大学本郷 2019年9月8日。古田徹也氏、高橋久一郎氏らと意見交換。

○ 書評会、土橋茂樹氏・茶谷直人氏の著書とともに、北海道大学 2019年12月14日。

千葉恵氏らと意見交換。

○ ワークショップ提題、哲学会第 59 回研究発表大会中のワークショップ「マクダウエルにおける合理性の概念をめぐって」にて「実践の合理性は実践に内在的にしか完全には理解できない、というマクダウエルの主張」と題する提題。オンライン、2020 年 10 月 31 日。ひとが合理的実践の合理性を見て取ることをめぐる近現代的偏見のマクダウエルによる批判を明確化・検討した。川瀬和也氏らと意見交換。

それぞれのイベントで問題についての認識を深めた。

論文 'Immortality and eternity: Cebes' remark at *Phaedo* 106d2-4', *Plato's Phaedo: Selected Papers from the Eleventh Symposium Platonicum* (Academia Verlag, 2018) 所収 (pp. 199-204)。『パイドン』における魂不滅最終論証の大詰めで、対話相手ケベスの応答が、魂の不死性と永遠性の関係についての謎めいた理解を含意していることを指摘し、背景にある考えを推測した。魂は自らによって生命をもたらされているがゆえにその生命供給は絶えることがない、という考えである。ケベスのこの考えと、『パイドロス』におけるソクラテスの魂不死論証とがともにアルクマイオンの考えと繋がっている可能性を示唆した。

○ 論文「浮気されれば気付かなくてもその分不幸になるか——という問いをきめこまかくする——」、『思索』51号、2018年 (pp. 33-55)。幸福は経験に他ならないとする立場に批判的な方向を取りながらも、ある人の幸福いかなをその人自身の幸福観(経験主義や反経験主義)にある程度まで相対化しうることを提唱した。

共著 Panos Dimas, Russell E. Jones, Gabriel Richardson Lear (eds.), *Plato's Philebus: a philosophical discussion*, Oxford UP, 2019 (Plato Dialogue Project の第 1 冊)。担当は Chapter 7: The Independence of the Soul from the Body: *Philebus* 31b-36c (pp. 106-123)。プラトン『ピレボス』31b-36c の考察を、魂が身体からの影響を受動的に受けるだけの最もプリミティブな場面から出発し、徐々に、そのつどの観点から、魂が身体からの独立性を示すますます重要な局面を見出していくものと特徴付けた。

○ 書評 国際プラトン学会のインターネット・ジャーナル (*Plato Journal*, vol. 19, 2019 年) に納富信留氏と共著で、日本語によるプラトン研究を紹介する寄稿を発表した (pp. 101-106)。前半で納富氏が近年の日本語のプラトン研究を概観 (Why we write in Japanese: A brief introduction to recent Plato studies in Japan)。後半で研究代表者はとくに丸橋裕氏『法の支配と対話の哲学——プラトン『法律』篇の研究』(京都大学学術出版会、2017年) (Yutaka Maruhashi, *The Rule of Law and the Philosophy of Dialogue: A Study in Plato's Dialogue Laws* (in Japanese)) を紹介・批評した。

千葉恵氏『信の哲学——使徒パウロはどこまで共訳可能か』(上・下、北海道大学出版会、2018年) に関連して。

○ 『信の哲学』を検討するシンポで提題、北海道大学、2020年3月7日。マクダウエルやアリストテレスの道徳心理学との関連で千葉氏の著書を論評、魂の分裂の問題にも論及した。

○ 『信』の哲学の書評、北海道大学哲学会『哲学』第54号(2020年9月)。パウロとアリストテレスの心魂論の、千葉による対比、アリストテレスにおける「人柄としての徳」とフロネーシスの関係等について見解を発表した。

○ 論文「『信の哲学』における信の根源性をめぐって——マクダウエルの道徳的心理学を念頭に描きながら」、『MORALIA』29号(2022年11月)。パウロの魂論をアリストテレスの魂論と突き合わせる『信の哲学』を、ひとつにはアリストテレス-マクダウエルの視点(フロネーシスを人柄としての徳とほぼ同一視)から検討した。

発表 'The psychology of the sophist: Plato's *Sophist* 267c2-268a9'.

・第1回、研究代表者主催のオンラインシンポ(次項を見られたい)、2022年3月14日。
・第2回、国際プラトン学会第XIII回大会(アセンズ、ジョージア大学、2022年7月18-22日)のparallel session、7月22日。
プラトン『ソフィスト』の最終定義で、ソフィストが自身の無知の多大なる「疑念と恐れ」を持つとされることが含意する魂論を解明した。

国際シンポジウム 'Symposium on Plato's Psychology' (「プラトンの魂論をめぐるシンポジウム」) 主催、2022年3月24日午前8-11時(米国太平洋時間で23日午後4-7時、米国東部時間で23日午後7-10時)。研究代表者自身の提題(上記参照)の後、Giovanni Ferrari 教授(米国カリフォルニア大学パークレイ校)が 'The Moral Psychology of the "Greatest Accusation" against poetry (Plato, *Republic* 605c5)' と題する、悲劇を観ることが魂をどう墮落させるのかに関する提題を、最後に Rachana Kamtekar 教授(米国コーネル大学)が 'The

Psychology of Philosophers' and Nonphilosophers' Virtue in Plato's *Phaedo*' と題する、知恵が諸情念の交換の貨幣とされる意味に関する提題を行なった。各提題は発表約 30 分、質疑約 30 分。20 数名の参加するシンポジウムでは質疑も活発に行なわれ、研究代表者の発表も様々の有益なコメントを得た。

発表 'Vague and non-straightforward for reasons: the argument in Plato's *Philebus* 28c6-31a4', カリフォルニア大学バークレイ校 Joint Program of Ancient Philosophy, 2023 年 10 月 3 日。ひとの理性（魂に宿る）は宇宙と支配する理性の原因性を不完全に模倣することであると論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 荻原理	4. 巻 54
2. 論文標題 『信の哲学』における信の根源性をめぐって マクダウエルの道徳的心理学を念頭に措きながら	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 MORALIA	6. 最初と最後の頁 71-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荻原理	4. 巻 54
2. 論文標題 書評 千葉恵 『信の哲学 使徒パウロはどこまで共約可能か』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 135-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Noburu Notomi, Satoshi Ogihara	4. 巻 19
2. 論文標題 [Recensão a] MARUHASHI, Yutaka, The Rule of Law and the Philosophy of Dialogue: A Study in Plato's Dialogue Laws (in Japanese), Kyoto University Press, Kyoto 2017. xiv + 443 + 25 (indices).	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Plato Journal: The Journal of the International Plato Society	6. 最初と最後の頁 101-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14195/2183-4105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi Ogihara	4. 巻
2. 論文標題 Immortality and eternity: Cebes' remark at PHAEDO 106d2-4	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Plato's PHAEDO: Selected Papers from the Eleventh Symposium Platonicum	6. 最初と最後の頁 199-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5771/9783896657466	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荻原 理	4. 巻 51
2. 論文標題 浮気されれば気付かなくてもその分不幸になるか という問いをきめこまかくする	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 思索	6. 最初と最後の頁 33-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Satoshi Ogihara
2. 発表標題 The 'suspicion and fear' of the sophist: Plato's SOPHIST 267e8-268a10
3. 学会等名 Symposium Platonicum (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Satoshi Ogihara
2. 発表標題 The "suspicion and fear" of the sophist: Plato's SOPHIST 267e8-268a1
3. 学会等名 Symposium on Plato's psychology (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Giovanni Ferrari
2. 発表標題 The Moral Psychology of the "Greatest Accusation" against Poetry (REPUBLIC 10. 605c5)
3. 学会等名 Symposium on Plato's psychology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Rachana Kamtekar
2. 発表標題 The psychology of virtue in Plato's PHAEDO
3. 学会等名 Symposium on Plato's psychology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荻原理
2. 発表標題 実践の合理性は実践に内在的にしか理解できない、というマクダウェルの主張
3. 学会等名 哲学会第59回研究発表大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荻原 理
2. 発表標題 『信の哲学』における信の根源性をめぐって マクダウェルの道徳心理学を念頭に描きながら
3. 学会等名 シンポジウム 『信の哲学』はサステナブルか!? (北海道大学)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Satoshi Ogihara
2. 発表標題 Education-related compulsion in Plato's REPUBLIC
3. 学会等名 2nd Asia Regional Meeting of IPS (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoshi Ogihara
2. 発表標題 Education-related compulsion in Plato's REPUBLIC
3. 学会等名 24th World Congress of Philosophy (FISP) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Paolo Crivelli, Pierre Destrée, Panos Dimas, Mary Louise Gill, Verity Harte, Russell E. Jones, Sean Kelsey, Gabriel Lear, Hendrik Lorenz, Susan Sauvée Meyer, Jessica Moss, Satoshi Ogihara, Giles Pearson, Spyros Rangos, Katja Maria Vogt, and James Warren	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 304
3. 書名 Plato's PHILEBUS: A Philosophical Discussion	

1. 著者名 荻原 理	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 マクダウェルの倫理学 『徳と理性』を読む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://platosociety.org/events/list/?tribe_paged=1&tribe_event_display=past&tribe-bar-search=Taipei https://wcp2018.sched.com/event/F1pt/03042b-classical-greek-philosophy-b
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Symposium on Plato's Psychology	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	カリフォルニア大学バークレイ校	コーネル大学	ジョージア大学